
精神科治療のコツ

神田橋條治著

岩崎学術出版社, 四六判 160頁, 2,530円, 2024年4月刊

(中村学園大学) 黒木俊秀

私の書架には、1984年に刊行された『精神科診断面接のコツ』を筆頭に、以下、『精神療法面接のコツ』『精神科養生のコツ』『心身養生のコツ』等、追補版や改訂版も含めれば、10冊を超える黄緑色の同一装丁の書籍が並んでいる。著者によると、本書は、これら「コツ」シリーズの最後になるという。確かに本書は「コツ」本の総集編の趣があり、過去の「コツ」本の引用箇所が多い。白柳直子氏との共著や原田憲一氏の『精神症状の把握と理解』への言及もある。そのたびに私はさまざまな書籍を取り出しては、該当する頁を忙しく繰り広げながら本書を読み進めた。とはいえ、本書は「コツ」シリーズを未読の人にも読みやすく、資するところが多いだろう。あるい

は、近年の著者が開陳している「邪気認知」や「気^{はり}の鍼」などの技法に首を傾げてきた堅実な対人支援の専門家にも是非奨めたい一冊である。

というのも、本書は160頁と小ぶりの書籍ながら、実に膨大な量の「コツ」情報が書き込まれているのである。しかも著者の真骨頂である自由連想のおもむくまま、天衣無縫な筆致のスピード感たるや、半端ない。

例えば、「診療の技法」の章では、発達処理過敏症（HSP）の傾向のある人には、気分が悪くなる有害物として、ポリエステル、電磁波、「幻の竹串」で判定できるという胎児期愛着障害を持つ人物等が列挙される。ゲツと目が点になった直後に、「『初回診察は初会』である」として、初診の終わりに「今回の、受診という大事業による、『疲れと、感想と、できれば質問』を、本人に問いかけるのを、定石としましょう。椅子から立ち上がり、立ち去る後ろ姿で、本日の診療の成果を味わいましょう」「今日、入院させた患者には、夕方の帰り際に、病室を尋ね、チョット話します。初回の際は『必ず』です。異国にきた人だからです」（103～104頁）という素晴らしい一節に出会う。ああ、私は、めくるめく連想の海に漂う感覚を覚えた。「コツ」シリーズのマルチバースを体現した一冊ともいえよう。無論、これまた著者お得意のレトリックや皮肉、おちょくりの類もあちこちに仕掛けられており、それを感知するだけでも楽しい。

著者の言を借りるならば、本書は読者の脳が「気持ち良い」と感じる箇所を拾い読みしても良いかもしれない。初心者には、終盤の「さまざまな、架空症例」から読みはじめ、診療場面における患者とその家族の周囲に漂う雰囲気に対する、著者ならではの精緻な観察と細やかな対応に感嘆してほしいと思う。その後、第1章「医療現場に臨むに当たっての心づもり」に戻り、そこから徐々に読み進めてはいかがだろう。そして、「『エヴィデンス』には、『誘惑』の魔力があり、『不確かさ』を隠蔽します」「馴染み続けると、『少数者切り捨て』の気分・習慣、が『こころ』の内に積みあがってくるのを自覚します。医療は通常、『少数者』のための作業であり、少数者への寄り添いの気分、の上に立っています」（22頁）というような指摘にハッとしてほしいと願う（著者の話術の雰囲気を味わうために、本書の文章は声に出して読むこと——読点や括弧に注意——を奨めた

い）。

今から40年前に上梓された最初の「コツ」本は、まだ駆け出しの精神科医であった私に、トラウマ級の強い衝撃を与えた。思うに、かの書は、西洋絵画の技法を徹底的に学んだ著者が描いた実に均整のとれた写実的な油絵の大作であった。かたや、「コツ」シリーズの掉尾を飾る本書は、まるで墨画の絵巻物の世界である。私は、『鳥獣戯画』を連想した。正直、愉悅に浸りながら読んだのである。かくも私自身に起きた変化が、臨床家としての精進のたまものなのか、それとも単に「脳の老化」なのか、おぼつかない。